

日本語コミュニケーション教育方法に関する研究

橋本, 恵子

<https://hdl.handle.net/2324/2236343>

出版情報 : Kyushu University, 2018, 博士 (芸術工学), 論文博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

氏 名 : 橋本 恵子

論 文 名 : 日本語コミュニケーション教育方法に関する研究

区 分 : 乙

論 文 内 容 の 要 旨

本研究の目的は、大学生の日本語コミュニケーション能力の育成、グループ・コミュニケーション能力（対話力、議論力、協働力）の育成を目指した演習コースを開発し、その教育実践結果について、実証データを基に検証することである。カリキュラムの開発にあたっては、Toulmin の議論モデルを視野に入れ、またコミュニケーション能力の基盤となる日本語力（日本語の論理表現能力）を支援するための教育方法として、時枝誠記の入子型構造を用いた文の理解・分析等も検討した。

議論、対話については、物理学者であり思想家でもある David Bohm の提唱する理論を取り入れた点に特徴がある。また、時枝誠記の「言語過程説」を、文法論だけでなく、日本における最初のコミュニケーション論として捉えた点でも新規性がある。

具体的には、日本語コミュニケーション能力の中でも、特にスピーチによる言語コミュニケーション能力、対話力を中心としたグループ・コミュニケーション能力を、実践力と理論の両面から育成するためのカリキュラムを開発した。また、グループ・コミュニケーション能力育成を目指した演習コースを実施し、各学生の学習状態とグループ・コミュニケーション能力を測定・評価することで学生の論理的構成力、対話力、協働力、議論力の変容について検証したものである。ここでいう対話とは、単に自分の意見や意思を相手に伝達するモノローグ的対話を超え、他者との関わり合いの中で自他ともに変容し、異なる見解を理解するという意味での「開かれた対話」(Open Dialogue) を指す。この「開かれた対話」とは、フィンランドで実践されている方法論である。

筆者が開発した「スピーチ構成図」は、日本人大学生だけでなく、日本語教育分野（日本語非母語話者を対象）にも活用することが可能であり、総合的な日本語コミュニケーション能力の育成を図るための授業モデルを開発・検証すると共に、グループ・コミュニケーション能力の育成を図ることに寄与することができる。授業モデルは、「アニメーション」(animatiion 仏、animacion 西、animazione 伊) の概念を応用することで、認知面だけでなく情意面にも配慮し、論理表現育成のための「スピーチ構成図」とグループ・コミュニケーション能力育成のための「コラボ・ディスカッション」(collaborative discussion) を総合的に取り入れた点に特徴がある。

自分の言いたいことを論理的に構築し、一方的に発表するだけでは真の意味でのコミュニケーションがなされたことにはならない。そこで、今後ますます必要とされるであろう「グループ・コミュニケーション能力」を、筆者が提案する「コラボ・ディスカッション」を導入することで育成したい。この「コラボ・ディスカッション」によって、学習者は「対話」、「協働」によるグループ・コミュニケーション能力を育成・向上させることができる。自分の意見をどのタイミングでどのように相手に伝えればより効果的に議論がなされるのかを学ぶとともに、他者との対話を通して、グループ内での意見の交換、異なる見解を持つ者への理解、グループ内での意見の変容を体験する事を通して、コミュニケーション能力を更に向上させることが可能となる。

また開発した授業モデルは、テキスト教材として出版し、学習者の自学自習を支援することが可能となった。国籍、学部、教科を問わず教員の FD (Faculty Development) 研修にも活用できる汎用性のある教材である。今後は、これらの教育実践結果をマルチメディア教材にすることで、更に学習効果を高められるような教材を開発することを課題としたい。